

令和4年度 杉並区八成小学校 学校評価 - 教育調査の考察、令和5年度の取組・方向性、第三者評価 -

対象	No	項目	設問	肯定的回答 R 3	肯定的回答 R 4	前年度比	考 察	課 題	次年度の具体的な取組・方向性	分掌
児童	1	学級経営	先生は、クラスのみんなが分かり合い、協力し合えるようにしてくれている。	80.3	79.8	-0.5	おおむね肯定的に答えている。	・否定的に答えている2割の児童のサポートをする。	・個性を大切にしつつ、協力し合える学級経営をしていく。グループ活動などみんなで活動できる時間を増やす。	特活
	2	学習指導 学習の個性化	授業では、学習を進める方法やペースを自分で決めながら学んでいる。	60.3	62.7	+2.4	昨年度より2.4%上がっている。 今年度の総合で、児童自身が学習計画を作り進めるなどを進めたこともあり、成果として現れた。	・学習計画を児童自身が決めていると実感が得られていない。	・どの教科でも、単元や学習活動によつては、学習計画を作らせて課題に取り組ませる。	研究
	3	学習指導 指導の個別化	授業では、自分の得意なところを伸ばしたり、苦手なところを少なくしたりできるように、個別に教えてくれている。	45.3	54.2	+8.9	昨年度より8.9%上がっている。 児童一人一人に寄り添いながら、学習を進めていくことができている。	・得意なことを伸ばす学習指導が行われていない。	・算数タイムや算数スペシャルなどで個別化を図る。 ・タブレットドリルを活用し進捗状況なども見取り、得意なところが伸びていることを価値付けしていく。	研究
	4	学習指導 探究の学び	授業では、自分の興味に基づいて問いや課題を立てて学んでいる。	64	61.8	-2.2	昨年度より2.2%下がった。 2番の項目が上がっていることから、下がっている点として、興味が好きなことと捉えられているとも考えられる。	・児童が主体となって進めていく授業が多くない。	・どの教科でも、単元や学習活動によつては、学習計画を作らせて課題に取り組ませる。 ・総合など、話し合いを通じて自分の興味関心に基づきピックアップさせて、どんなことを調べ実践できるか学ばせていく。	研究
	5	協働的な学び	授業では、自分が必要な時に、必要な仲間と協力しながら学んでいる。	74.9	72.5	-2.4	昨年度より2.4%下がった。 協働的な学びで、教師側が意図した組み合わせなどを配慮してきたことが下がった一因とも考えられる。また、必要な時、必要な仲間が好きな時、好きな仲間とも捉えられているかもしれない。	・児童が「必要な時に、必要な仲間と協力」していいんだという意識が低い。 ・意図的なペアやグループ学習だけでは、児童が必要な時に協働的な学びができるいると実感でいていない。	・児童に「必要な時に、必要な仲間と協力していいんだよ」ということを繰り返し伝えていく。 ・対話的な学びや常に協力しながら学ぶ授業づくりをする。 ・学習内容に応じて、ペアやグループで学習する目的を児童に示し、グループ作りをするようにする。	研究
	6	学習の成果	学校の授業によって、分かることやできることが増えている。	85	80.2	-4.8	昨年度より4.8%下がった。保護者の同じ項目も3.6下がっている。 指導の個別化が9.5%も上がっており、発展的な学習が行えていないとも考えられる。また、教師の授業のねらいが明確とされておらず、学習の学びに対しての満足感が得られていないのではないか。	・児童に対し「学校の授業によって、分かることやできることができた」と感じることができる授業が行えていない。 ・教師のねらいが児童に明確に伝わっていないことで、児童が学んだことに実感をもてていない。 ・児童の実態に即したねらいになっていない。	・発展的な学習を組み込んでいく。 ・タブレットドリルを活用し、それぞれの学習進度状況に応じ教材を提供する。 ・授業の導入で、前時の振り返りを行い、本時との学習の違いや積み重ねが分かるような授業を計画する。 ・ねらいを明確にし、後半にねらいについて振り返り考え方、個々の児童が一時間で何を学んだか実感させる時間を確保する。	研究
	7	学習の評価	先生は、授業で自分ができたことを誉めてくれたり、間違えたところを教えてくれたりしている。	74.1	76.5	+2.4	昨年度より2.4%上がっている。保護者の同じ項目も0.5%上がっている。 児童一人一人に寄り添いながら、学習を進めていくことができている。	・児童に授業中に褒められている実感が少ない。	・褒める、教えるは当たり前であるが、取り組み方の過程などに対しても具体的に褒める。 ・引き続き、児童一人一人に寄り添いながら、机間指導を通じて褒め、学習を進めていく。	研究

	8	ICT機器の活用	先生は、授業において電子黒板やデジタル教科書を活用している。	93.3	88.9	-4.4	高い水準を保っているが、昨年度より約5%下がっている。授業でのタブレットの活用が「当たり前」になってきているため、更なる効果的な使用方法を開発・共有する必要がある。	・教員のICT機器活用能力のさらなる向上が必要である。	・各学年ICT推進委員を中心に活用できる教科単元等を話し合い、支援員と連携を取りながらさらなる活用能力向上を図る。	ICT
児童	9	系統的・連続的指導	先生は、今の授業で学習していることが、前の授業や今後の授業とどのようにつながっているか、教えてくれている。	73.2	72.3	-0.9	昨年度より0.9%下がった。学習の成果とも関連し、指導の個別化が9.5%も上がっており、系統性を踏まえた発展的な学習が行えていないとも考えられる。	・系統性を踏まえた発展的な学習が行えていない。 ・前時の学習とのつながりや他教科との関連が児童に分かるように伝わっていない。	・授業の中で他学年とのつながりを指導する。 ・系統性を踏まえた発展的な学習を行っていく。 ・導入で前時の学習の振り返りを行い、本時の学習の違いに気付かせる。 ・学習内容に合わせて、他教科との関連を教師が意図的に伝える。	研究
	10	道徳教育	道徳の時間では、友達や家族、地域の人たち共に、よりよく生きることの大切さについて、みんなで話し合っている。	66.7	71.4	+4.7	昨年度より4.7%上がっている。保護者の同じ項目は3.0%下がっている。道徳の研修会、道徳の掲示もされ、児童が授業からの学びを実感できる授業が行っていると考えられる。	・児童が他者との関わりを大切にしていることを実感できていない。	・研修やOJTで道徳研修を行い、授業力を高める。 ・道徳の掲示板を有効活用する。 ・道徳授業の導入や振り返りで、自分たちが関わった地域行事や、家族との出来事などを想起させ、自分たちの生活が他人との支え合いで成り立っていることを実感できるような授業を行う。	研究
	11	体育・健康教育	先生は、健康な生活を送るために必要なことを教えてくれている。	75.6	79.5	+3.9	昨年度より3.9%上がっている。日頃より感染予防などの保健指導を継続してきたためと考える。	・2割の児童が理解不足であると捉え、保健体育・給食・生活指導等、多様な学びの機会が必要である。	・今年度同様、保健指導を継続していくとともに、個々の児童が健康な生活を考える学びの機会をつくる。	体力
	12	読書活動	学校や家などで、一か月間に本、新聞、雑誌、調べものをするための資料を読んだ。	昨年度なし	74.2	-	毎学期に読書週間を設定し、読み聞かせや読書郵便等の読書に親しむ取組は効果があると考える。	・4分の1の児童が1か月間に書籍や資料を読んでおらず、読解力や資料活用力への影響が懸念される。	・読書センター・学習センター・情報センターとして学校図書館の充実を図り、児童の知的好奇心を高める。	研究
	13	地域連携	地域の行事に参加している。	43.6	45.4	+1.8	地域のイベントが増えてきてはいるが、コロナ禍の影響は大きい。	・コロナの状況で変動することがある。	・これからも地域のお知らせやイベントを紹介していく。手紙を配布するときに声を掛ける。	特活
	14	地域連携	先生は、地域の人たちと協力しながら、授業や学校行事をよくしてくれている。	61.1	65.7	+4.6	支援本部の方々の存在が浸透してきた。	・支援本部やゲストティーチャーが地域の方であることが児童に伝わっていない。	・地域の人が協力してくれていること、相手に感謝の気持ちをもつことを指導していく。ゲストティーチャーへのあいさつ前に、地域の人であることを強調してどんな方が紹介を入れる。	特活
	15	教育相談体制	友達や先生、家族のことなどで悩んだとき、学校に相談できる大人（担任の先生、専科の先生、スクールカウンセラー、等）がいる。	69	77.4	+8.4	昨年と比べ、肯定的な意見が上昇した。「大人」について具体的に記載された部分もあり、日頃から様々な場面で多くの学年に声をかけたり理解を深めたりしてきた中で、児童や保護者にとって専科、SC等も相談できる人として広まったことが考えられる。 また、担任による全員面談を全クラス、学期に一度行ったため、児童が同期間に担任と話をする機会を設けることができたのもよかったです。	・今年度、教育相談委員会、コーディネーター、校内委員会で情報の管理と対策を推進してきたが80%には満たず約25パーセントの児童は、自分から相談できなかったり、あるいは学校に相談できる人がいないと感じていたりする可能性があるため、困ったときに相談できる環境を整える必要がある。	・今年度の取り組みを継続して行いながら、令和6年度の教育相談コーディネーター配置の動きにつながるように、教育相談内で担当者をつくり、情報をより即時にまた定期的に共有・検討をしていく。 ・全員面談を引き続き行い、いじめアンケートや体罰調査など、専科の先生やSCなど、担任以外に話したい人はその希望をかけるようにすることも検討する。	教育相談

16	独自 特色ある学校の 取り組み	自分からすすんで、あいさつや返事をしている。	83.7	72.5	-11.2	低学年は肯定的な回答が多く、高学年は否定的な回答が多い傾向がある。各学年ごとのあいさつ運動や学年集会などで、意識づけをしているが、「すすんで」という文言で自分をふり返って否定的に回答している可能性がある。	・あいさつは強制されてするものではなく、自然に気持ちよくできるような環境づくりが大切である。教員自らが手本となっているか反省したい。 ・すすんでできている児童が確実におり、よいことを認め合い自信をもたせることが必要である。	・自分からあいさつ・返事をできるような指導をする。低学年はあいさつしたくなるような工夫を教室の扉などに取り入れる。高学年は恥ずかしさが出てくるが、社会に出るうえで必要なスキルとして指導していく。引き続きあいさつ運動を行っていく。	特活
----	-----------------------	------------------------	------	------	-------	--	--	--	----

令和4年度 杉並区八成小学校 学校評価 - 教育調査の考察、令和5年度の取組・方向性、第三者評価 -

対象	No	項目	設問	肯定的回答率 R3 (回答不能:件)	肯定的回答率 R4 (回答不能:件)	前年度比	考 察	課 題	次年度の具体的な取組・方向性	分掌
保護者	1	学校生活全般	子どもの学校は、全体として満足できるものである。	81.6 (回答不能2)	77.3 (回答不能4)	-4.3	肯定的回答率が4%以上下がった。学校行事などに制限があり、保護者が来校する機会が少ない。	・教員の学習指導や学習規律、学級経営に課題がある。 ・学校での児童の様子を保護者に伝える機会、情報を与える機会が不足している。	・研修やOJTの充実させ、学習規律や教科指導、学級経営を改善していく。 ・朝会や集会、縦割り活動などの個々の長所を伸ばし活躍できる場を設けることで、大きな行事の方法や他学年との関わりも大切にしていく。 ・学校公開を6学年同時にい、年間5回に増やす。（土曜3回、平日2回）	教務
	2	一貫教育/異校種の協働	連携する小・中学校による小中一貫教育（小・中学校の教員による協働授業、児童・生徒の交流など地域活動への参加等）が進められている。	40.5 (回答不能82)	56.1 (回答不能40)	+15.6	肯定的回答率が15%以上増えた。中学校との直接的な交流がもてていないう学年がある。 ・どのような活動をしているのか情報発信が足りない。	・中学校との直接的な交流がもてていないう学年がある。 ・どのよう活動をしているのか情報発信が足りない。	・あいさつ運動（代表委員会）、図書員による読み聞かせ（12年）、吹奏楽部演奏会（456年）、中学校訪問（6年）、中瀬中サミット（6年）などの取組を学年だよりと学校だより、学校のHPで情報を発信する。3年生も何らかの交流に加わっていく。	教務
	3	学校評価	学校は、自校の教育活動に関する評価結果とそれに基づく改善策等の情報を提供している。	62.6 (回答不能20)	62.6 (回答不能15)	0	アンケートを取るときに保護者会やお便りなどで学校評価についての取組や改善策について伝えたことに一定の効果があったと考える。	・アンケートの回収率がやや低い。	保護者会でアンケートに答えて頂く際に、一定の時間を取り、アンケート回収率を上げる。	経営支援
	4	学級経営	学校では、子どもが安心・安全な学校生活を送ることができる学級づくりを行っている。	74.9 (回答不能3)	72.3 (回答不能8)	-2.6	子供から聞く話でしか保護者は回答できないため、回答しにくい可能性がある。	・保護者に学校の様子が伝わっていない。個人面談でしか保護者とゆっくり1対1で話ができない。	みんなが学校に来なくなるような学級作りを行う。どんな学級経営をしているのか教員間で共有したり研修を開いたりする。保護者会や個人面談で保護者と話す機会を大切にし、学校での様子を伝えていく。	特活
	5	学習の成果	子どもは、学校で学ぶことにより、必要なときに、必要なことを、自ら学んで身に付けることができる力が育っている。	67.4 (回答不能2)	63.8 (回答不能7)	-3.6	昨年度より3.6%下がった。その中で回答不能も増えている。児童の同じ項目も4.8%下がっている。 これは、児童が授業からの学びを実感できていないことにより、保護者にも成果として伝わっていないと考えられる。	・児童が学びの実感が得られていない。 ・児童の学習の成果を保護者が認識できていない。	・探究的な学びの授業展開をする。教師自ら授業改善、教材研究をすすんで行えるような研修やOJTの計画を立てる。（教育計画に計画を入れる） ・来年度の校内研究でも探究的な学びができるような研究をする。 ・家庭学習でタブレットを積極的に使っていく。	研究

	6 学習評価	学校は、子どもの学習状況を適正に評価している。	69.3 (回答不能7)	69.8 (回答不能8)	+0.5	昨年度より0.5%上がっている。児童の同じ項目も2.4%上がっている。学習の成果と連動し、3割の保護者は学習評価に納得感が薄いと考える。	・保護者へ学習状況の評価の仕方が明確に伝わっていないと考える。 児童の学習に対する、得手不得手の二極化も要因の一つである。	・評価に関しては、学年で保護者会で詳しく説明をする。 ・個人面談で、個人の学習評価を具体的に丁寧に伝える。	研究
	7 ICT機器の活用	学校は、ICT機器（電子黒板やデジタル教科書等）を活用した授業を行っている。	72 (回答不能24)	70.8 (回答不能19)	-1.2	児童の同項目質問が肯定率88%であるため、保護者と児童の認識に大きな差が見られる。タブレットを持ち帰らない低学年の保護者の肯定率がかなり低いことから、土曜公開での活用や学校でタブレットを使ったことを話す宿題など、保護者に周知することが肝要である。	・保護者へ運用実態が明確に伝わっていない。 ・教員のICT機器活用能力のさらなる向上が必要である。	・土曜公開で、タブレットを活用した授業を積極的に行う。 ・各学年ICT推進委員を中心に活用できる教科単元等を話し合い、支援員と連携を取りながらさらなる活用能力向上を図る。	ICT
保護者	8 道徳教育	子どもは、学校での生活を通して、他者と共によりよく生きるための力が育まれている。	79.1 (回答不能3)	76.1 (回答不能8)	-3.0	昨年度より3.0%下がった。その中で回答不能も増えている。児童の同じ項目は4.7%上がっている。 これは、児童の質問では「道徳の授業」と限定しており授業からの学びは実感できてるが、保護者の質問は「学校での生活」と広くとらえられていることの違いからくるものと考える。	・児童から保護者に、学校での他者との関わりが伝わっていないと考えられる。 児童が他者と協働し思いやりや尊重したりしたことが、家庭での話題として挙がっていない。 ・「他者と共により良く生きるためにの力」を、道徳の授業のみならず、他教科や特別活動、学級活動等の中で、児童が多様性を受け止め尊重する関わりができるか、学級経営を見直すことも必要である。	・教科としての道徳だけでなく、広く学校生活において「他者と共によりよく生きるための力」を育む指導をしていく。 ・保護者が道徳授業地区公開講座の講演会に参加できるようにする。 ・道徳授業公開の日に全ての保護者に授業の様子を見せる。番号制限がある場合は、1年を通して学校公開で道徳を1度は公開できるようにする。 ・学校便り等で、児童と他者との関わり（地域連携行事等）について記載し、発信していく。	研究
	9 体育・健康教育	子どもは、学校での生活を通して、体力や食、生活習慣をはじめ健康な生活を送る力が育まれている。	84.8 (回答不能2)	78.8 (回答不能6)	-6.0	児童の項目では数値が上がっているので、保護者には取り組みが伝わっていないと考える。	・保護者に学校での取り組みが伝わっていないと考える。	・学校便りと連携し、取り組みを伝えようとする。また、栄養士や養護教諭とも連携し、食育や保健指導に積極的に取り組んでいく。	体力
10	教育相談体制	子どもが人間関係や自分自身の心の問題で悩んだとき、学校はその解決を、きめ細やかに支援してくれている。	42.8 (回答不能57)	49.4 (回答不能28)	+6.6	全員面談を学期に1度行ったことがどの子供たちも話ができるきっかけとなり、その様子が伝わったのではないか。	・上がったとはいえ、半分を超えていない。児童は77%が肯定的であり、子供たちを通してもっと伝わるとよい。 ・児童の問題を保護者が相談したときの学校の対応を捉える必要がある。	・SCと児童との接点をつくり、SCだよりの児童向けに書かれた記事を教室で読み合ふことで、家庭にも伝える。 ・児童や保護者からの相談をまず受けとめ、必要に応じ組織で対応する。	生活
11	特別支援教育	学校は、子どもたちの発達に関する課題など、障害理解を深める情報を提供している。	47.2 (回答不能50)	48.9 (回答不能33)	+1.7	保護者会を活用してほほえみだよりをただ配るだけではなく、説明をおこなったり、1学期に全校朝会で特別支援教室について紹介をおこなったり、夏休みに特別支援教室利用保護者向けに保護者懇談会をおこなったこと等の新たな取り組みが保護者に伝わったのではないか。	・提供という部分について様々な形で発信をしてきたが、結果としてはほぼ横ばいで変化はなく50%にも満たない。学校がどのような取り組みをしているのか、児童に対してどのような対応をしているのか伝わっていないと考えられる。	・SCからの相談室だよりやほほえみだよりは継続し、ほほえみだよりは年5回程度となった発行を7回程度に増やす。障害理解・合理的配慮について学校で実践している内容の情報発信をし、紙での情報発信のみならず子供たちをよくみて関わり、子供・保護者とも信頼関係を築いていく姿勢を磨く。	教育相談

	12	特別支援教育	子どもは、特別支援学校や特別支援学級の子どもと交流したりする機会がある。	23.8 (回答不能169)	34.2 (回答不能91)	+10.4	「特別支援」は支援教室も含まれて回答しているかもしれない。そのため支援教室のことについて朝会を通して児童向けに理解を図ったことや、実際に副籍交流該当クラスの取り組みが実現できたことで、そのような理解が保護者の方にも見えたのではないか。ただ、実際に肯定的な回答率は上昇したものの50パーセントに満たないのは、上記の通り、学校の実態と質問レベルに差があることと考える。	・特別支援学校との交流として副籍交流は、在籍を希望する学年が決まつてくるため今後も学年が固定される。そのため交流の機会がない学年もある。特別支援学校を校内の事情によりセンター的機能として使うことはあっても、保護者や児童あてに支援学校の情報などを発信することはなく、はちり教室としての情報提供はあるが、この質問としては回答が難しい。	・副籍交流の機会は指定された学校の要望に寄り添い取り組みを続け、ほほえみだよりや廊下等の掲示などで、相手先との確認を行った上で、学級が行った取り組みを他の学年や保護者に知ってもらうよう計画する。	教育相談
	13	地域連携	学校は、家庭や地域と連携・協力して教育活動を行っている。	65.3 (回答不能15)	72.6 (回答不能8)	+7.3	コロナが減って、学校行事が復活したり規模が大きくなったりした。保護者にボランティアをお願いした。	・家庭状況でお手伝いをお願いできない場合もある。コロナの状況によっては行事に変更がある。	・学習する内容によって学年と保護者・地域で連携を取っていく。	特活
保護者	14	いじめ防止 不登校対策	いじめや不登校などに対して、未然防止、早期発見、解決に向けて、教員が協力して取り組んでいる。	36.5 (回答不能97)	47.4 (回答不能51)	+10.9	年に3回の全員面談だけではなく、保護者会でもほほえみ便りの内容とともに周知がされたことで上がったのではないか。また教室に入っていない児童や児童同士のトラブルが減った部分を通して、改善されている環境が児童から伝わっているのではないか。	・周知に限らず、まだまだ残る不登校やいじめ等の問題解決に努めていかなければならない。次年度支援員の数が減る可能性も含めると教員の連携をもっと強めなければならない。	・ほほえみだよりを継続していく。 ・児童が安心して過ごすことができる環境づくりをめざし、子供たちの実態を把握しながら教職員が協力して取り組んでいく。 ・さらなる広報活動として、HP(いじめ防止基本方針・ふれあい月間)を利用する。	生活
	15	独自 特色ある学校の 取り組み	学校は、外部講師を活用して、子供たちの興味・関心を高めるように努めている。	66.2 (回答不能64)	72.8 (回答不能24)	+6.6	学年だよりで、外部講師を活用した活動の様子を掲載したり、アンケートを取るときに外部講師の活動を具体的に記載したことも効果があったと考える。	・児童の探求心を育てる目的として、学校の特色ある教育活動や地域・外部連携活動を行っているという意義を、教員が理解して計画することが大事である。	・今年度同様子供たちの実態に合わせて、外部講師を活用していく。	経営支援
	16	独自 特色ある学校の 取り組み	子どもは、自分からすすんで、あいさつや返事をしている。	66.6 (回答不能2)	63.6 (回答不能9)	-3.0	保護者は家の生活を見て、回答しているのではないか。学校での様子は伝わっていない。児童の自己評価が下がったことも踏まえ、学校でも家庭でもすすんであいさつや返事ができない児童がいることは事実である。	・「子どもは～」という問い合わせ「八成小の子どもは～」と変えると学校全体のこととして回答してもらえるのではないかと考える。 ・保護者や来校者に児童があいさつや会話をできる習慣ができると良い。	・家でもあいさつ・返事ができるように指導していく。あいさつすることの良さを道徳のみならず学校生活全体を通して気付かせていく。保護者会であいさつの取り組みを発信していく。	特活

【第三者委員会の意見】

学校として、「温かな学級経営」「もっと知りたい、やってみたいと主体的に学ぶ力を育てる授業」を目指し、教員の資質向上を図っていこうとする姿勢を感じた。あいさつについては、コミュニケーションの基礎ともなる。学校・保護者・地域が協力し合い、共に子供たちの成長を支えていくことが大切である。